

現代装束を再検討する

永井 とも子

一 展覧会を通しての再検討・再確認

これまで衣紋道に携わってまいりましたので、現代装束については「所与」のものとして当然のごとく受け止めておりました。今回、高倉流御宗家、実践女子大学の先生方とともに平安時代の装束を再現するプロジェクトに参加し、改めて現代装束を見つめなおす契機となりました。

二〇二三年十二月一日～十二月二十八日まで丸紅ギャラリーにおいて「源氏物語・よみがえった女房装束の美」展がおこなわれ、プロジェクトの成果を公表することになりました。『源氏物語』若菜下の巻の「六条院の女楽」に登場する明石の君の装束を再現したものでした。

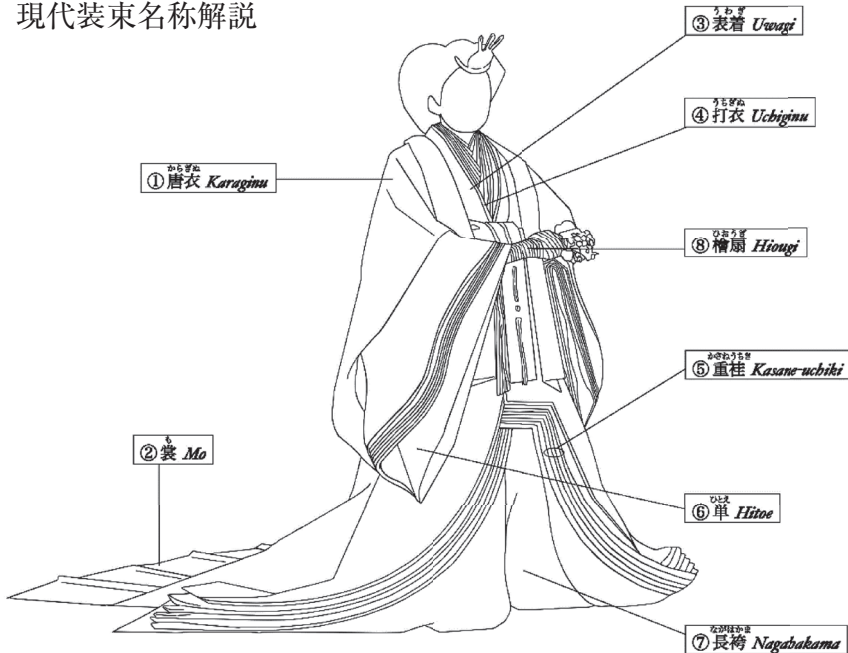
装束を展示する場合、一領（一枚）一領、衣桁にかけ展示するのが通例ではないでしょうか。ですが、今回は特別に、着装の実演で御覧いただくことの多い「空蟬」の姿で展示を行いました（本誌口絵カラー写真参照）。「いかに源氏物語

の中での装束を着装した姿でイメージしていただけるか」に焦点を当てた、衣紋道高倉流二十六世高倉永佳宗家の熟考の結果が可視化されたものでした。これは、装束の世界の関係者にはもとより、一般の方々にも画期的な展示方法であったと思います。これが功を奏し、会期二十四日間で一六五三〇名の来館者があり、図録も初刷は期間半ばに達しないうちに完売、増刷しましたがそれも完売、展覧会終了後も問い合わせが多く、ついに三度目の増刷とうかがっております。

プロジェクト発足の初期段階に、まず高倉宗家監修による精緻な現代装束の制作を行い、現代の女房装束の構造や着装手順を確認する作業を行い、これにより現代装束（強装束）と平安期女房装束に通ずる柔装束とを比較する視点を見出すことができました。

『源氏物語』の時代、つまり平安時代中期の装束を検討してゆきますと、当然のごとく受け止めて

現代装束名称解説



いた現代装束も、それがまさしく「現代」のものであることが浮き彫りになってまいります。「源氏物語」を専門とする横井孝実践女子大学名誉教授は平安期の文学作品や古記録から装束の記述を博捜し、その上で佐藤悟実践女子大学教授により『源氏物語絵巻』に描かれた女房達を一人一人切り出し、その装束の分析について高倉永佳宗家を中心とする研究チームが協議、検討をくり返しました。その中で、私も永年現代装束の着装に携わってきた経験を、提供させていただきますました。

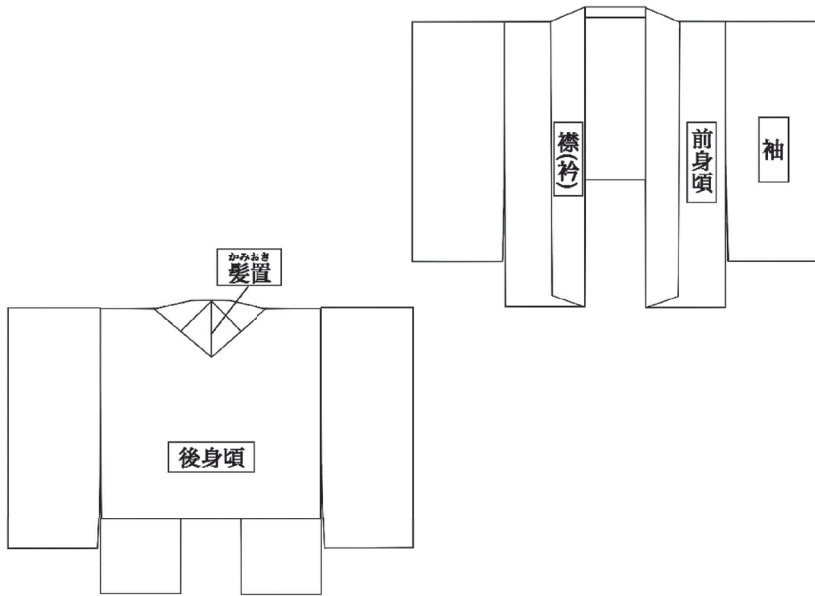
検討の結果、たとえば、『源氏物語絵巻』に登場する人物とその装束は一定の様式に表現されているものではなく、人の動きに合わせて描き分けられているという「写実」が確認されました。立位であることは稀で、座位が中心の生活であることなどは、現代装束との大きな相違点でしょう。それに基づいて着装実験も繰り返しました。

再現装束については、別稿に詳述されると思います。再現装束を考証してゆく過程で、比較する対象である現代装束の意義も再確認した思いがあります。既に手馴れたと思っていた現代装束でしたが、前記の展覧会の図録『源氏物語・よみがえった女房装束の美』を作成する段階で、原点に戻るつもりで再検討いたしました。本稿では、その図録を補完するという形で解説したいと思います。

二 唐衣から檜扇まで

①唐衣からぎぬ

唐衣裳装束のもっとも上にはおる、上半身のみの衣です。『枕草子』つかさなどで、官得はじめたる六位の笏に「なぞ、唐衣は。短衣といへかし』とされど、それは、唐土の人の着るものなれば』とあります。



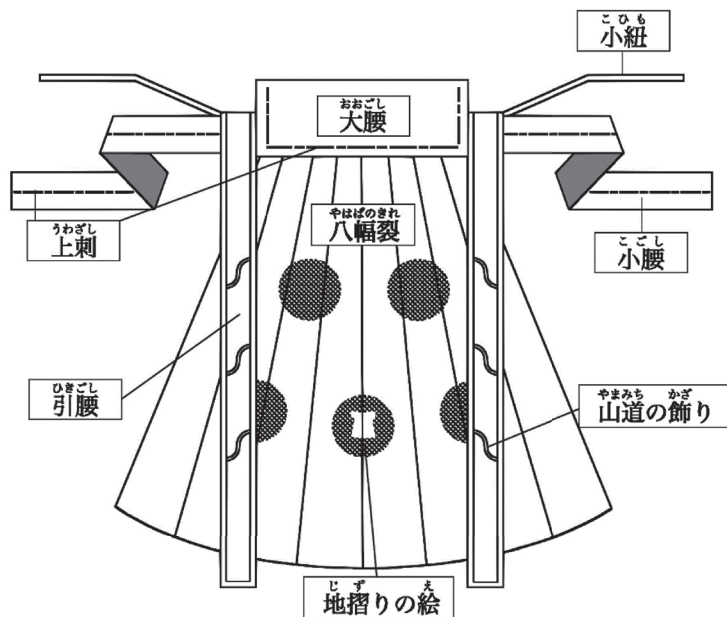
「唐衣」とは、もとは文字どおり「大陸風のきもの」の意味で、奈良時代の「背子」^{からぎぬ}の変化したものとされています。律令を初めとする文化全般、唐風を規範としていた古代の意識の名残といえますが、国風・当世風に変化しても名前だけが残ったものです。丈も袖も短く、襟を外に大きく折り返して着る特徴的な装束で、一番目につきやすいものといえます。現代は背後に「髪置」がありますが、平安時代中期にはなかったものです。

もともと身分によって色目と文様と地の織りかたに決まりがあり、ある種のものは天皇の許しを得て身に着けることになっていたので、総称して「禁色」^{きんじき}と呼ばれ、禁色を身に着けることはたいへん名誉なことでした（『源氏物語よみがえった女房装束の美』コラム1参照）。

この唐衣は式正^{しきじょう}を表すもので、「裳」ともに身分のある人の前では必ず着用するものです。

②裳^も

背の腰から下にまとして後に引く衣のことです。これも

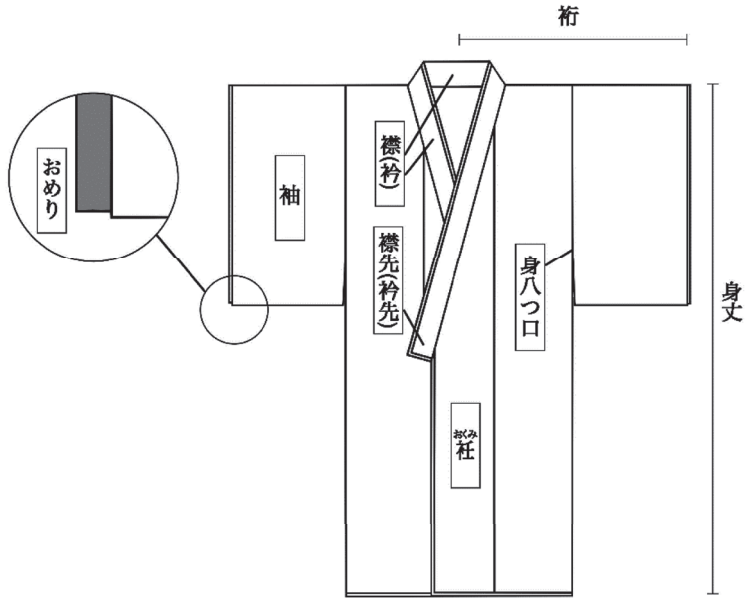


目を惹く装束で、女房装束(俗にいう「十二単」)の特徴的なもののひとつです。

平安時代の初期までは儀式も政務も立つて行うことが多く、この時代には腰をひとまわりする巻きスカートの形式でしたが、やがて殿舎の中で坐ったかたちの動きが多くなると、後に寄せていたものが、さらに後ろ半分だけになったと考えられています。

裳には何種類もの帯類がついていますが、「唐衣」の表地と共布をもちいる帯を「小腰」と呼びます。『源氏物語絵巻』では、これで裳を腰に結び留めているように見えます。それに対し、現代の小腰は装飾のために軽く結わえているだけで、実際に裳を結び留めているのは、小腰の下に隠されるように付されている細い「小紐」なのです。

『枕草子』「身を変へて天人」などは、かうやあらむの段に、「ただの女房にてさぶらふ人の、御乳母になりたる。唐衣も着ず、裳をだにも、よいはば着ぬさまにて、御前に添ひ臥し」とあり、貴人の乳母になると(当然身に着ていなければならぬ)唐衣や裳も着用しない、無遠慮な姿



になると評する場面があり、唐衣と裳がほぼ一体のものとして認識されていたことがわかります。

裳を身に着けることは女性にとつて成人のあかしでもあり、平安時代には女子の成人式は「裳着の儀」と呼ばれました。また、この裳にも、唐衣同様、文様や生地に「禁色」の制がありました。

③ 表着^{うわぎ}

文字通り、桂の上に着用するものです。『源氏物語絵巻』でも、家庭内のおうちとけた場面では、この上の小桂などを着けない表着姿のままの場面がかなり多く見かけられます。

唐衣裳装束では、「単^{ひとえ}」から「表着」まで形状がほぼ同じ形の桂を重ねてゆきますが、全身を覆うのではない唐衣と裳とをのぞけば、表着はもつとも「上に着る」との意味から名づけられました。ほかの桂よりいちだんと意匠を凝らした生地を使うのが通例になっています。

④ 打衣うちぎぬ

砧で生地を打って光沢を出した衣。一条兼良(一四〇二〜一四八一)の『女官飾抄』には「紅の綾を打ちて重ねられ候。をさない人は濃き打衣なり。……濃き打衣とは、紫の打ちたるいふなり……五の衣の上に重ね」とあります。従って、ここでは⑤重桂の上に着装します。

後には漆塗りの板に絹地を張り付け、乾いてからはがして、光沢と張りを漆で強調する「板引いたびき」という手法も用いられることもありました。

昭和三年(一九二八年)の御大礼のときは関東大震災の直後であり、大正の御大礼より控えめな準備が進められ、この「板引」も廃止となり現代に至っています。

⑤ 重桂かさねわづらぎ

うちきは文字通り内側に着るものが原義ですが、これを何枚も着重ねることによって、襟元・袖口に様々な色彩のバリエーションを生むことができます。平安の大宮人は四季の移り変わる自然を色に託しました。この色の組み合わせを「くの匂い」「匂い」は嗅覚ではなく視覚を表す。単色の濃淡の意味)、「くの薄様うすよ」「薄様」は濃淡に白を加えた組み合わせなどと称します。

その枚数は、古くは特に定めがなかったのですが、平安中期以降、紫式部の時代以降は華美を誇るようになると、二〇枚、二五枚と重ねるようになりました(高倉永佳、佐藤悟、横井孝「平安期女房装束の復元に向けて(二)」『源氏物語』『源氏物語絵巻』を基盤として・重桂』『実践国文学』第一〇〇号、二〇二一年三月)。奢侈(「過差」と言っていました)が目には余るとして、院政期にはしばしば禁制が出され、鎌倉期以降、五枚が規定されますと「五衣いつぎぬ」と呼ばれる

ようになりました。

五衣を重ねると五枚の衿が交差して襟元に重なり、見た目がややうるさくなります。そのため交差した衿を入れ替えて下前側に五枚、上前側に五枚と一つの重ねの様に変えてゆきます。これを「ときあわせ」と言い、高倉流特有の方法です。実演の動画でその様子をご確認いただきたいものです。

重ね着すればそれだけ重量が増します。今日では、着る人の負担に配慮して、身ごろは一枚で、襟・袖・裾まわりだけ五枚重ねにした「比翼仕立て」が用いられるようになりました。

⑥ ひとえ
単

直接肌に触れる肌着です。小袖が出現する前は、単が肌着の役割を果たしていました。そのため、他の衣よりも丈を大きく仕立てて、襟・袖・裾には、他の衣からみれば汚れ除けになってくれるという実利的な働きもあったようですが、重桂よりも大きく外にはみ出た姿が装束全体のアクセントにもなっています。

裏地をつけないため、袖口や襟・袖・裾などの衣の端の部分は縫わずに糊を付けて、内側に丸め締めて始末する「ひねり仕立て」となることが特徴です。

なお、現存の『源氏物語絵巻』には小袖は見えませんが、『伴大納言絵巻』などの女性像に見受けられるところから、平安後期には既に小袖が日常に用いられていたのではないかと考えられます。

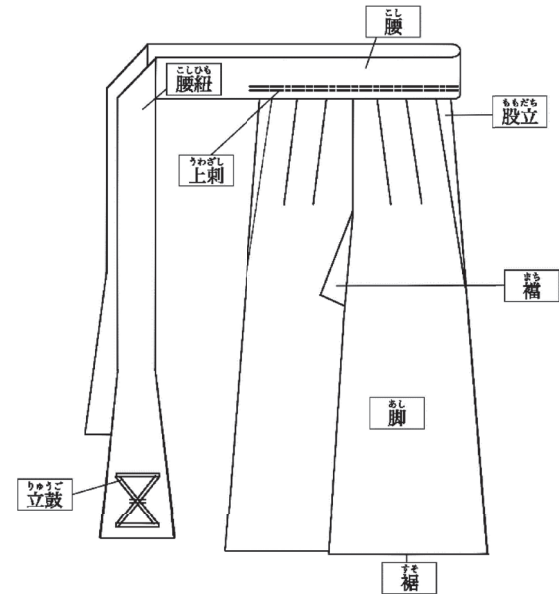
⑦ ながはかま
長袴

袴といえは足首までのものを思い浮かべるかも知れませんが、それは「切り袴」といって別物です。これは引き摺る

⑧ 櫛扇ひおん

平安中期の装束では必ずしも櫛扇は別物ですが、現代装束は一体のものとして扱います。成人男性が笏の代わりに持つ櫛扇がありますが、ここでは女性のものに限った話です。女性用は男性のものより大

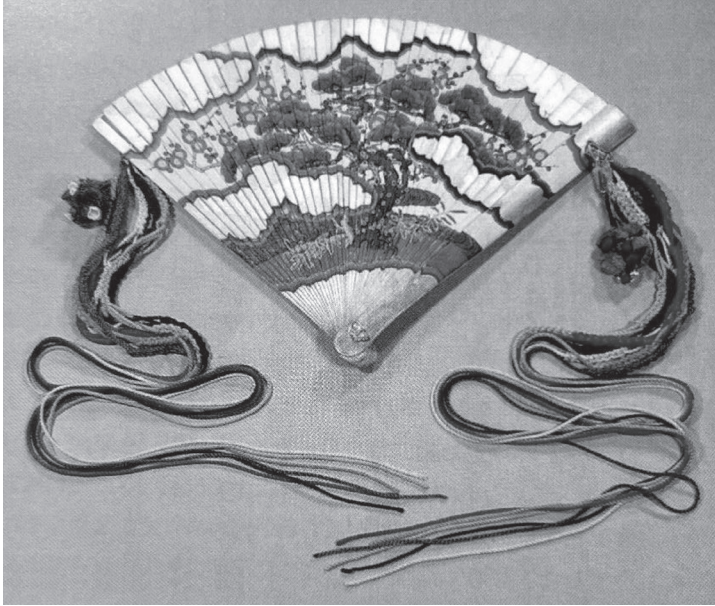
とありますが、色の使い分けは時代によっても違いがあるようで、現代装束では、既婚者は緋色、未婚者は濃色となる習わしとなっています。ただし、現在では既婚者であつても、第一子が生まれるまでは濃色を用いることもあります。



程の長さのもので、平安時代には「袴」といえばこれしかありません。従って、古くは「袴」といえば、この長袴を指します。切り袴が用いられるようになるのと並行して長袴の語が定着しました。

長袴は、天皇の御引直衣おひきのうしを除けば、一般的には女性ものを指します。その形態は、経たて(＝縦糸)よりも緯ぬき(＝横糸)に太い糸を使う精剛の地の布をもちいて横方向の張りを強くします。さらに、裏地をつけず、表地をそのまま裏に折り返して二重にする「引き返し」という仕立て方をして、足に布地がまつわるのを防ぎ、歩きやすくしています。

袴の色には、「緋色ひいろ」と「濃色こきいろ」があります。一条兼良『女官飾抄』には「袴のはりばかま、祝のとき、こきはり袴さるなり」



御檜扇(昭憲皇太后御料) 『図録宮廷の華源氏物語』

きく、上の図版のように美麗な裝飾を施してあります。親骨に飾り花や五色の長い糸が特徴的ですが、『装束雑事抄』によれば南北朝のころ、「十二単」という語が通常に使われるような時代に始まったと考えられています。

室町時代には飾りの花の種類はまだ決まっていませんでしたが、江戸時代になると、山科流では「松・梅」、高倉流では「松・梅・橘」を用いるようになります。

飾りの糸は、燃よった絹糸をさらに「蛸結こむすび」という結び方でポリユームを持たせて下げます。それが五本なのは中国の陰陽五行説に拠るものとされ、「五色の糸」と呼ばれます。ところが実際には、糸を二本で一組みとする「左右よ繰り」にして、一色を加えて六筋を扇の左右にそれぞれ長く垂らしています。

三 装束の着装について

女性の装束をよく「十二単」といい、私たちも便宜的にそう称することもあります。それはあくまでも俗称です。



この一式の装束の正式名称は「五衣唐衣裳」と申します。

装束を「お服^{かく}」といい、お方(いわゆるモデル。高貴な方に準えています)に装束を着付けることを「お服を上げる」、お方の装束をお解きすることを「お服を下げる」といいます。ただし、高倉流では「お服上げ」と表すのは両陛下のみ、他は「着装」という言葉で使い分けをしています。

一つ一つの装束については、前節に①から⑧まで解説した通りですが、それぞれに「御^{おん}」がつくと両陛下のお召し物を示すこととなります。たとえば「御東帯」「御五衣・御唐衣・御裳」といえばそれぞれ天皇陛下・皇后陛下の装束の意となります。

以下、写真を見ていただきましょう。中央に立つモデルが「お方^{かた}」です。

本来、お方には南または東に向いて立って頂きます。これは南と東が吉方とされていることによります。吉方は陰陽道の歳徳神の宿る方角とされますが、平安時代には陰陽師によって、その都度吉方を占わせるものでした。『小右記』などの古記録にはそうした記事が散見されます。

お方の前に座っている人を「前衣紋者^{まええもんじや}」、後ろを「後衣紋者^{うしろえもんじや}」と言い、必ずこの二人一組で着装を行います。

写真のお方を御覧下さい。現代の装束の髪型は「大垂髪^{おおすべらかし}」と言います。

着装についての詳細は動画で御覧になることが出来ます。

〔実践女子大学ホームページ・「装束着装動画」〕

https://www.jissen.ac.jp/branding_genji/shiryokan6.html

〔丸紅ギヤラリー・YouTubeチャンネル〕

<https://www.youtube.com/watch?v=a0C2l2tzu-Q>

そちらを参照していただくことをお勧めします。ここではその要点のみ箇条書きで記しておきましょう。

- (1) 「小袖」に紅精剛(紅色の光沢のあるもの)の「帯」をしめる。
- (2) 足には「襪」(指股・コハゼのない足袋のようなもの)を履きます。
- (3) 「長袴」の腰の紐を「お方」の腰の右脇前に片鉤結かたかぎびにする(高倉永佳・永井とも子・佐藤悟・横井孝「平安期女房装束の復元に向けて(三) — 「絵巻」による平安期女房装束復元の試み」とその前提『実践国文学』第一〇四号、二〇二三年一〇月)。
- (4) 「単」をつける。以下、後衣紋者と前衣紋者の働きが遅滞なく連動していることが肝要です。それは単に見栄えをよくするということではなく、着装の仕上がり具合に影響が出るからなのです。
- (5) 「五衣」。
- (6) 「打衣」。
- (7) 「表衣」と、(5)から順に重ねてゆき、前衣紋者が襟先・袖口が美しく映えるように整えている間に、後衣紋者は裾を丁寧ていねいに整えてゆきます。

(8) 「唐衣」は、その形状(前節参照)から着付けるといふよりも、うち掛けるように羽織る、という着けかたになります。
(9) 「裳」の大腰を後腰高く着け、小紐を前に廻し、しっかりと結びます。この際も後衣紋者と前衣紋者の連携が大切です。結んだ小紐の上に小腰で隠すように結びます。前記の通り、現代装束では小紐が実質的な役割で、小腰の方は装飾性の強いものになっています。

(10) 「檜扇」。お方(モデル)は前衣紋者から檜扇を渡されると、要に近い部分を右手で持ち、左手で扇の先の部分を支え持つ形をとります。

これで装束着装の完成です。こうした手順を踏んで現代の装束(五衣唐衣裳)は着装されている訳です。完了の形を動画であれ静止画像であれ御覧になれば、まさに立ち姿の美しさ、写真などの記録に残る事を追究した着装方法であると考えられます。座位が常態の平安装束との差異がそこに明瞭に示されることになりました。

四 おわりに

これまで現代装束の解説、着装方法を説明しましたが、「源氏物語」の中に表されているように座した生活の中での装束の姿と、現代の立って儀式に参列する姿との間には、「仕様」、「用途」、「美意識」もまでもが大きく相違していたという事実を痛感させられました。

ところが、その「相違」「差異」が際だった平安中期の装束と現代装束の間に、興味深い「共通点」のようなものがあることが分かりました。

動画を御覧になればお分かりいただけると思いますが、十二単(五衣唐衣裳)の着装は一領(一枚)重なるたびに、下の衣を留めていた衣紋紐を抜きとり、結んでは抜き取り結んでは抜き取りと二本の衣紋紐を使い、最終的には裳の小紐一本で止められています。『源氏物語絵巻』を見てゆくと、女房たちの襟元・袖口には何枚もの装束の重なりが見出されますが、それを留める「帯」や「紐」の類いがほとんど見えません。裳の小腰のような紐があるきりなのです。

こうした「差異」と「共通点」を通して、さらに研究を続けてまいりたいと考えております。そのためにも現代装束を見極め再検討することは、決して無駄な作業ではないとも考えております。

(インターナショナル儀礼文化教育研究所理事長)